

空虚に真である条件文の語用論

北 村 久

北海道大学文学部専門研究員

論理的な概念装置は明晰でよく分節化されているものだが、その中には日常の中であまり使わないものがある。その一つに以下のような空虚に真である条件文の使用が挙げられる。

(例) もしジョンがその試験で100点を取ったら、メアリーはジョンに食事をおごる。

ここでは前件が偽であることを前提とする。このとき条件文は空虚に真である。こうした条件文は事象の把握に関する語用論のインターフェイスの下では不自然であることを予測することができる。本研究は、この予測を確かめ、条件文が空虚に真である時どういう不自然さがあるのかを解明し、この探究によって産み出されるいくつかの帰結を述べる。

具体的には、空虚に真である条件文は、それが事象の把握に関する語用論のインターフェイスで使われているとき、グライスの格率である“Be brief” (avoid unnecessary prolixity) (Grice (1989:27))と情報量に関する格率に対して提案することができる情報量に関する新しい補助の格率と関連性に関する格率に違反するので、第一に、その前件が偽であることを話者が知らないときと、第二に、その後件が偽であることが前提されているがその前件が偽であることが焦点になっているときの二つの場合を除いて語用論的に不自然であると主張する。加えて、後者の例外的な場合はこれらの格率を満たすことを主張する。

特別な条件がない空虚に真である条件文は偽なる前件という一つの条件の下で後件の命題の真偽に関係なく真である。この場合、後件の論理式の真理値の指定は、条件文全体の真理性の指定にとって情報上冗長である。言い換えれば、命題というものは真偽が確定したものだという要求を満たすために後件の真偽が一つに定まらなければならないことになるがその必要はなく、そう定まることは条件文全体の真理性にとって情報上冗長であることになる。このことは、グライスの Manner の格率の一つである“Be brief” (avoid unnecessary prolixity). (Grice (1989:27))に違反する。

特別な条件がない空虚に真である条件文の前件は成り立たないことが確定しているので、それをわざわざ仮定してみてその帰結を述べるのは *informative* でない。この仮定はその状況に照らして *informative* でない。ここで以下の新しい補助格率を提案する。”Do not make your contribution less informative than is required (for the current purposes of the exchange).”空虚に真である条件文はこの補助格率に違反する。

特別な条件がない空虚に真である条件文の前件は成り立たないことが確定している
ので、それをわざわざ仮定してみてその帰結を述べるのは **relevant** ではない。当該の
命題が偽である状況でそれが真だとわざわざ仮定するのは **relevant** ではない。従って、
この場合は以下のグライスの関係の格率である “Be relevant.” (Grice (1989:27))に
違反する。

特別な条件がない空虚に真である条件文は語用論的に不自然であるという主張は基
本的に正しいと思われるが、以下の例はある問題を提起する。

(自然な例) **If you're a genius, then I'm a monkey uncle.** (Birner (2013:19))

Birner (2013:19)は後件が明らかに偽であるから前件は偽であると指摘する。後件が偽
であることは条件全体を偽なる前件へと解消する。この例は自然である。この例が与
えられると、我々は主な論点を次の主張に修正しなければならない。即ち、空虚に真
である条件文はその後件が偽であることが前提されているがその前件が偽であること
が焦点になっているときに自然であり得る。この状況はグライスによって展開された
格率を満たす。なぜなら前件が偽であることは余剰でないし、情報量があり、関連性
があるものだからである。よって、この例はグライスの格率を支持する。

同様に、その前件が偽であることが話者にとって知られていない空虚に真である条
件文は自然である。ここでは通常の場合に条件文を空虚にする前件の偽という値が条
件文の使用に影響しない。その条件文は不自然な特徴を持っていないので、この設定
の下ではそれは自然である。

特別な条件がない空虚に真である条件文に関して以下の二つの理論的考えを提案す
る。即ち、第一に、数理体系や論理体系の内部ではそこに於ける形式言語の整合性を
保つために空虚に真である条件文を使うことができるが、第二に、そうした形式言語
の体系の外にある事象を把握する語用論のインターフェイスでは空虚に真である条件
文の使用はその冗長さや不自然さのために禁じられるべきである。

この後者の考えに基づいて、事象の把握に関する語用論のインターフェイスの下で
条件文が空虚に真であるという性質に依存しているクリプキ構造は語用論的に不自然
な場合があることを指摘する。

クリプキ構造が語用論的に不自然な場合があることとの関連で、本研究の含意を以
下のスローガンの形で提案する。

(論理に於ける語用論的基準の導入に関するスローガン)

事象の把握に関わる語用論のインターフェイスでは、標準論理の概念装置をそのまま
採用することは合法的でなく、このような装置を語用論的に自然な論理学の道具立て
に制限しなければならない。

数理体系や論理体系内の推論に関しては、この語用論的基準と整合性の保持などとい
った他の数理的・論理的基準を比較・考量しなければならない。ここで真理条件に対
する語用論を念頭に置いているのである。論理の道具立てに語用論的な基準を導入す
ることを提案する。具体的には、この基本理念は、最適な論理的推論、経済的な論理
的推論、情報に関して自然な論理的推論、直観的にも自然な推論・論理などを追究す
るということである。